

東京家政大学 学修・教育開発センター

# クレッド CRED通信 18 2023.9

「自主自律の学び」を研究・支援します。

**01** CRED TOPICS  
令和4年度アセスメント総括

**02** CRED TOPICS  
K-PORTはこう活用する!

**03** CRED TOPICS  
スタートアップセミナー自主自律  
5年間の歩み



狭山キャンパス 図書館

**04** 学生CRED  
新入生ウェルカムパーティー  
&緑苑祭告知

**05** CRED REPORT  
教職員研究会第1部  
学習時間の変化

**06** CRED REPORT  
GPS-Academic実施報告  
授業アンケート

**07** CRED COLMUN  
看護学科FD

# 令和4年度アセスメント総括

## アセスメント

教学マネジメントを進めるにあたって必要となる「アセスメントプラン」。

これは、「学生の学修成果の評価（アセスメント）」について、その目的、学位プログラム共通の考え方や尺度、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針（「教学マネジメント指針」より）」と定義されています。つまり、学修目標の達成状況について、どのタイミン

グで、誰が、どのようにして（どんな評価方法で）測定するのかを定めることです。

令和4年度は、各学科・科にて推進委員会を設置し、アセスメントプランの策定やそれに基づいた分析や課題の抽出、課題を受けた具体的なアクションプランの設定を行いました。また、アセスメントプラン策定にあたって、「そもそも何を目的としているのか」「何をすればよいのか」といっ

た具体的内容を理解するためのミニFDを複数回開催しました。

本記事では、アセスメントプラン策定を推進した教員のお話を通して、本学の令和4年度のアセスメントに関する取り組みを振り返りたいと思います。

（アセスメントについて詳しくはCRED通信16号もご参照ください。）

### これまでの取組



アセスメント推進を通して感じたこと

### まずは具体的なイメージを持った課題意識からの取り組みを

兼古 昭彦  
学修・教育開発センター 所長

グランドデザイン答申（平成30年）や教学アセスメント指針（令和2年）が出される中、CREDでは、全学的には着手の遅れている印象であったアセスメント推進に対する施策に取り組んできました。現状の評価指針、評価手法の偏りなどが議論されてきましたが、全学的な可視化の取り組みは、令和元年度「学科・科の学習成果の可視化のために」というリサーチウィークスでの提案からが実質的な動きであったかと思っています。一部の学科は先行した取り組みを行っていましたが全学的には遅れている印象は否めませんでした。しかし、先生方、職員みなさんのご協力ご理解を得て、令和4年度、ようやく全学的なアセスメントプランの実施にたどり着くことが出

来ました。今後、可視化に係る課題や、問題点が多く見出され議論されることとありますが、このアセスメントプランの取り組みがどのような形で本学の教育の質向上につながっていくのか、見出された課題をどう解決するのか、差し当たり令和5年度に取り組んでいただくアクションプランの実行が要です。まずは具体的なイメージを持った課題意識からの取り組みが大切であると思っています。

ここまでのアセスメント推進を実施するにあたって、なかなか理解していただくことが難しいと感じたのが学修成果の可視化のプロセス、その把握とサイクルの生み出し方です。動きの起点がどこなのか、いろいろな観点があるかと思いますが、やはり科目レベルが基本単位としてしっかり回った上で、その上位階層が回ることが大切だと思っています。しかし、今後、学科から学部、全学へとアセスメントが俯瞰的な観点に広がる中、基本単位である科目単位のアセスメントについての推進をどのように

行なっていくのかは未だ課題として残っています。また、DPが起点である学修成果の可視化全体についてですが、CPのアセスメント、APのアセスメント、それぞれのアクションプランの役割もまだまだ不透明、不明瞭な印象があります。現在は令和4年度のアセスメントプランから見出された課題改善の実行計画である令和5年度アクションプラン実施の最中となっていますが、令和5年度のアセスメントプランがどう行われているのかについても把握、確認していき、サイクルを止めない無理のない運用等の提案もしていく必要があると思っています。

これからより大きな波が訪れるという緊張感のある状況の中、CREDは本学の学修の質保証を本質的かつ実質的にサポートする部署であることを強く認識し、多くの御意見をいただきながら、全教職員とともに、未来に向かって取り組んでいきます。

## 様々な観点から分析を試み、データに基づいて問いを明らかにする

阿部 藤子  
家政学部児童教育学科

児童教育学科では、学科内の「カリキュラム検討プロジェクト」のメンバーが主にアセスメントの作業を担い、それを学科内で共有する形で進めました。

アセスメントの眼目は、DPが各科目の履修によって達成されているのかを検証することですが、どんな指標を使ってアセスメントに取り組むかを話し合いました。学生のGPAは勿論のこと、議論するうちに、教員の評価が学生の自己評価と一致するのか、そもそも各科目で行われている評価は妥当なのか、またこれまで気になってはいたものの取り組んでいない、入試形態ごとの学生の学修実態（成績）や出口である進路との関連（教員採用試験の可否）など、明らかにできそうな問いを洗い出して、必要な指標データをCRECから提供していただき分析を試みました。

昨年度取り組んだ課題は主に以下の五つです。

### ①DP1～DP8のGPAを算出し、1年次から3年次の伸長も明らかにする。

これについては、DPごとの達成度、及び3年間の伸びが全体としては伸びているものの、DPによって若干の傾向の異なりがあることが見出されました。

### ②①を学生の達成度アンケートと比較する。

ほとんどのDPで学生の達成度アンケートの方が低い傾向が見られましたが、DP6～8については、他のDPよりも学生が高く評価をしている傾向が見られました。

### ③科目区分ごとの成績

講義科目よりも演習科目や少人数科目の方が、評価が高くなる、という教員がなんとなくもっている印象を、データを元に確認しようと考えました。学科の専門科目すべてを対象としたところ、やはり、演習科目で講義科目や実験実習科目よりも「秀」「優」の評価の割合が高い結果が出ました。

### ④教員による評価のばらつき

アセスメント科目（3科目）を対象に、複数教員の担当科目の教員ごとの評価のばらつきをみたところ、若干の偏りが見られました。ルーブリックに基づいた評価を続け、今後も注視していきたいところです。

### ⑤入試区分ごとの学生の実態

1年次前期のGPA比較（3学年分）と令和元年度入学生に関する1年次～3年次のGPA推移を明らかにしました。全体的にどの入試区分でも同様の伸びが見られましたが、一部の入試区分では、異なる傾向が見られました。

上記の内容は昨年9月の教職員研究会でも報告したものです。アセスメントにあたっては、CRECからデータを提供していただきましたが、アセスメントに至る以前のデータ処理にかなりのエネルギーを要しました。一部の教員に負担が偏ったのも事実であります。

今後、同様の検証を重ね、経年変化を見るとともに、DPの妥当性や必要であればDPの変更も視野に検討を重ねていくことになると考えています。

## アセスメントを通して学生の学修状況や成果を俯瞰的、あるいは個別に把握する

保坂 遊  
子ども学部子ども支援学科

本学科では、令和元年度よりアセスメントプランを策定し、本学科が掲げるDP、CP、APに対する学修成果の可視化と把握に向けて、学科内にアセスメント委員会を組織し、検討してきました。

令和4年度では、APに対してGPAやGPS-A、達成度アンケートの推移等より分析を行い、入試形態別入学者の学びへのモチベーションや取り組む姿勢の差異などの課題が抽出され、初年時教育からの動機付けや学修目的の明確化の重要性について示唆を得ました。

CPについては、履修状況や各科目群のGPAの比較より、基礎教養科目の科目設置の適切性、DPに基づいた専門的・特色的な包括的カリキュラムの編成、更にはカリキュラム改正も含めた定期的な点検や見

直しの必要性が課題として挙げられました。

DPについては、主にGPAによる達成度の分析を試み、各DP項目に対応した科目群比較より、それぞれの学生の学びの深さの傾向を把握することが出来ました。また、アセスメント科目における科目ルーブリックの実施結果から、学生の具体的な学修状況を把握することができ、各学修年次において段階的に学生が習得すべき力の有効的な評価方法の可能性を探ることができました。

これらのアセスメントの作業を通して実感することは、第一に学生の学修状況や成果を俯瞰的、あるいは個別に可視化し把握することができるという利点です。その為には、各学生の入学時から在学時、卒業時、卒後に至るまでの一貫したデータを用いることや、アセスメントの目的を明確にした適切なデータの選抜なども重要となってきます。

また、アセスメントのプロセスにおいて浮き彫りになってくることは、学科として「どのような学生を養成するのか」といった

教育骨子を礎としディプロマポリシーの体现化、更には、CP、カリキュラムマップ、カリキュラムチェックリスト、シラバス、科目評価へ連なる基準の精度や信頼性といった教育体制の課題です。こうした課題改善の取り組みには、アセスメント委員会のみならず、学科に携わる全教員の協働が欠かせません。DPを具現化するための教育課程の基本単位は個々の科目であることを教員間が常に意識し、シラバス、授業内容、評価基準の重要性について共通理解を図ることも不可欠です。

アセスメントはあくまでも現状の実態把握であって、肝心なことは抽出された課題に対して、どのようなアクションを起こしていくかという具体的な施策にかかってきます。またそれらの再評価のためには一定の年月が必要されることを考えると、見通しを持った計画とスピード感のある確かな実行が求められることを再確認し、引き続きアセスメントからアクションへのサイクルによって、教育の質向上へ努めて参ります。

## 自律的な学習者となり、 学修成果を確実なものへ



本学では今年度からK-PORTを導入しました。これは、本学のカリキュラムポリシー(CP)において「ディプロマポリシー(DP)に示した教育目標を達成するために、毎年度、学生自身が自己目標を設定したうえで学修を進め、その成果としての各科目の評価および総体としてのGPAをもとに自己評価を行い、それに対する各学科の担当教員のコメントによって学修成果のアセスメントを行います。」と定められていたことに対応したのですが、どうしてこのような記述をCPに盛り込む必要があったのでしょうか。

周知のとおり、中央教育審議会[2014]「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～(答申)」での提案を受けて、学校教育法施行規則改正を経て、2017(平成29)年度から3つのポリシーが義務化されました。

3ポリシーの義務化は、簡単に捉え直せば、「教員が何を教えるか」から「学生が何を身に付けたか」という大学教育の根本的な転換であったといえます。大学は研究機関でもありますので、何を教えるかという点は教員の研究と連動させつつこれまでも十分に検討されてきたといえますが、それだけでなく、学生が十分な学修成果を得ていないという主には産業界からの批判を受けて、学修成果の保証を求める方向へと大きく転換したと捉えることができます。

本学でも昨年度から取り組んでいるアセスメント・プランとそれに基づくアセスメントは、そうした学生の学修成果をIR情報等を踏まえて総体的に捉えようとする試みであるといえます。

ただ、総体として学修成果を保証するためには、当然ですが、個々の学生の学修成果をどのように把握・支援・保証していくのかも考える必要があります。もちろん、すでに個々の科目ごとに適切な評価、それに基づく個別的な指導などに取り組みられてきているところですが、3ポリシーに基づく学修成果の保証とは、個々の科目の学修を積み上げれば予定調和的に卒業時の学修成果(DP)が身に付くとは考えず、大学(学部・学科)の組織的な取り組みとして、学修成果を保証すべきと考えるところに特徴があります。

そうした個々の学生の学修成果を把握するツールとして、K-PORTが導入されました。K-PORTは個々の科目の成績だけでなく、DP項目ごとの達成度、それと自己評価とのズレなど学生自身が自らの学修状況を把握することにも役立つものです。本学では、これまで科目ごとの成績しか学生に対して提示できずにいましたので、K-PORTが導入され意義は大きいといえます。

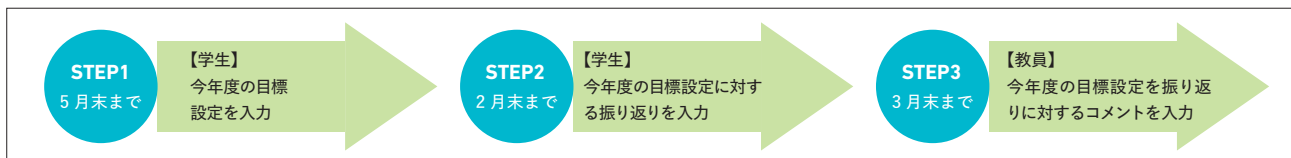
このように学生はDPを達成していくことが求められるわけですが、眼前の科目を修得するという短期的な目標ではなく、DPという比較的長い期間を想定した目標の達成に向けて自らの学修をマネジメント

しなければなりません。学修のマネジメントとは、DPの達成に近づくための具体的な到達目標の設定→実施→振り返り→目標の改善……というPDCAサイクルを意味しています。すなわち、学生は自律的な学習者として自らの学修をマネジメントすることが求められるようになったのです。

ただ、学生は当初から自律的な学習者ではありませんし、大学で授業に出席し、課題等に取り組み、試験を受けるというプロセスを繰り返したとしても、自立的な学習者となるわけでもありません。学生が自律的な学習者となるためには、適切なアセスメントがあることが効果的です(ジマーマン, B. J.・シャック, D. H.編 [2014]『自己調整学習ハンドブック』北大路書房、塚野州一・伊藤崇達監訳、240頁以下参照)。アセスメントの方法は面談など多様に考えられますが、本学では、教職員にとっても負担がそれほどかからない目標設定・振り返り・教員コメントというサイクルを取り入れることで自律的な学習者に向けた支援を行い、一人一人の学生がDPを達成することを目指すことにしたのが先のCPの記述ということになります。

教職員のみならずの協力を得て学生が自律的な学習者となり、それぞれの学修成果を確実なものとし、東京家政大学という「港」からよき船出をしていくツールとしてK-PORTを活用していただければ幸いです。

### K-PORT入力の流れ



STEP1  
5月未まで

【学生】  
今年度の目標  
設定を入力

STEP2  
2月未まで

【学生】  
今年度の目標設定に対する  
振り返りを入力

STEP3  
3月未まで

【教員】  
今年度の目標設定を振り返り  
に対するコメントを入力

# 学生が立てた今年度の目標

## ●家政学部

- 課題や問題に直面した際に、情報を適切に収集し分析するスキルを磨くために、読書や研究を通じて自己啓発を図ったり、関連する書籍や論文を積極的に読んで知識を広げる。(服飾美術学科)
- 来年度はEVEに参加したいので、裁縫に関する知識と能力を最低限身につけたい。(服飾美術学科)
- 私は高校で文系科目を学んできたため、理系科目についていけるか不安だ。だからこそ、勉学に人一倍努力をし、分からないところは少しずつ無くして理解を深めていきたい。(環境教育学科)
- 芸術の知識を深めるために、積極的に美術館や展示会に行く。その時気に入った作品等あれば必ず記録し、今後に活かせるようにする。(造形表現学科)

## ●栄養学部

- インターンシップに参加して実際に働くことの雰囲気を知り、自分が何に向いているのかを考える。(栄養学科)
- 課題は期限を絶対に守る。できれば、期日の2日前には終えるようにする。また、授業の復習を次の授業までにする。(管理栄養学科)
- フードコーディネーターの資格を取得し、幅広い食の知識を身に着ける。どのようにしたら食事がおいしそうに見えるのか学び、今後の学習や将来に生かしたい。(管理栄養学科)

## ●児童学部

- 保育や子どもに関する基礎を学び、身につける。学んだことを具体的にどんな場面で大切にすべきか、活かすことができるかを考えられるようにする。(児童学科)
- ピアノの苦手を克服する。少しの時間でもいいから毎日ピアノに触れることは絶対条件とし、堂々と弾き歌いができるよう努力する。(児童学科)
- 習い事のラボや保育園でのボランティアなどで子供とかかわる経験を積みたい。(初等教育学科)

## ●人文学部

- 英語でのコミュニケーション力を高める。そのためにGlobal Communication Iの授業で自信を持って間違いを恐れずに積極的に英語を話す。(英語コミュニケーション学科)
- 批判的思考力とリーダーシップが欠けているので、情報を抽出して吟味することを意識すること、グループなどで活動する際には積極的に意見を述べることで、自主性や率先性を伸ばしていきたい。(心理カウンセリング学科)
- 授業に主体的に参加し、わからないことは先生に質問、自分で調べるといった基本的なことをしっかり行う。また予習・復習を抜きに行き、自分なりの勉強方法を身につけ、学びの土台を作る。(教育福祉学科)

## ●健康科学部

- 積極的に人と話したことが多くないので、将来患者さんとの信頼関係を築き、患者さんが安心して治療に望めるような声かけをコミュニケーション論や実習などで学びたい。(看護学科)
- 初めての人と積極的にコミュニケーションをとること、リーダーシップを育てるために、討論の多い授業(特にスタートアップセミナー)を頑張りたい。(看護学科)
- 国家試験で使う、人体の構造や生理学などは一年時から勉強を進めておく。基礎を身につけておく。(リハビリテーション学科)

## ●子ども支援学部

- チームや班での話し合いに積極的に参加して発言する。また、司会などの他者と多く関わる役職などにも積極的に挑戦してみる。(子ども支援学科)
- ボランティアに参加し、そこで子どもや職員の方との関係性を築くとともに、自分自身への課題を設定する力をつけたい。(子ども支援学科)

## ●短期大学部

- 資格及び免許取得がめざすところがあるので、保育者として現場で生かせるような学びをしていく。苦手なピアノやパソコンは予習復習を特にしっかり行い、前向きに取り組めるようにしたい。(保育科)
- 編入学を希望しているためレポートの完成度の向上、確実な課題提出をする。(栄養科)



# スタートアップセミナー 自主自律 5年間の歩み

令和元年度にスタートアップセミナー 自主自律が開講してから、今年で5年目を迎えた。本学に在籍している学生（大学）は、全員がこの授業を受けていることになる。他の授業にはない特徴をもつこの授業を通して、学生たちは何を得たのか？5年間で変わったこととは何か？この5年目を節目とし、教員・学生それぞれの視点からこれまでのスタートアップセミナー 自主自律の歩みを振り返った。

## 教員から見たスタートアップセミナー 自主自律

### 本科目の役割と意義

本科目は、大学における「自校教育」に位置付けられます。大学にはそれぞれ歴史・特徴があり、いわば個性があります。自校教育の目標のひとつは、学生が自身の在籍する大学について、建学の精神や歴史、現在の社会的な役割などを知ることにあります。

しかし、知識を得ることが主眼ではありません。学科横断でクラスを編成し、異なる学科に入学した5名がひとつのチームを作り、協同学修を通して目標を共有し、授業を組み立てています。学生自身が、所属する大学の歴史と特徴を立体的に体感し、それらと自身、チームの仲間と自身とを共鳴させ、将来社会を担う自主自律の姿勢を身に付けていくことが、授業科目としての本当の目的です。そして、教職員にとっても、本学が全体としてもつ特徴と社会における役割とを再認識することに繋がります。

### 自校教育科目部会長として

本科目を担当する年度を重ねるにつれ、学科ごとの特徴やチームごとの雰囲気をつ

えられるようになってきたように感じています。部会長を拝命してからは、各学科から選出された部会委員とCRED職員の多大なご尽力をいただき、授業内容の見直しを行ったり、授業を担当する教員が基本的に統一された授業と成績評価を行えるよう制度を整えたりしてまいりました。複数クラスにおいて複数教員が同様の内容で行うことから、マニュアル的なものはどうしても必要となってまいります。教員が「決められたことを決められたようにやる科目」と強く感じてしまうと、相対して成績担当者としての責任感が弱まってしまふことにもなりかねず、バランスの難しさを痛感しています。

### 今後の展望

各学科のもつ特性や諸研究所が扱う専門分野の総体としての本学を見つめると、現在の日本における女子大学の役割を、教職員も学生もきちんと認識することはもちろんのこと、社会に対して存在意義を正しく発信することが大変重要と思えてきます。

本科目をチームで受講した学生は1年生後期からはそれぞれの学科で専門性を身に

付けていくことになります。3年生後期や4年生前期などにかつてのチームの仲間と再会し、情報共有の場を設けたり、学科の専門性をマッチングさせて社会課題に取り組むプランのコンテストがあったりするのもよいのではないのでしょうか。卒業したらそれで終わり、大学は単なる通過点、ではなく、本学に在籍した体感がその後も自身形成感として残ることは、結果として本学が社会であり続けるための根幹となっていきます。

令和5年度をもって、本科目を担当したことのある教員は56%を超えました（板橋キャンパス）。保つべきところは保ち、変えるべきところは変え、本科目も本学も成長し続けることを希望します。



Writer 宮本 康司  
Koji Miyamoto

家政学部環境教育学科長、自校教育科目部会部会長  
担当科目「サイエンス基礎実験」「生態利用学」「行動学実験」、主な著書「ウニ学」（共著・東海大学出版部）、「バイアスの心理学」（共同監修・Newton別冊）、現在の専門分野：行動科学、科学教育学、環境教育学、生態学

### 社会パートの設問と発表テーマから見る5年間の変遷

社会パートでは、グループごとにテーマを決定し、議論などを重ねて最終回でプレゼンテーションをします。

	設問	発表テーマ例
令和元年度 令和2年度	どんなことが女性の活躍を阻んでいるのか？	保育所不足、女性の仕事と子育ての両立、男性の育児や育休、女性のアンコンシャス・バイアスなど
令和3年度	どんなことが個々人がベストパフォーマンスを発揮することを阻んでいるのか？	LGBTQ、ジェンダー差別、男性の視点から見たDV、家庭における男女平等、ヤングケアラーなど
令和4年度 令和5年度	どんなことが個々人がベストパフォーマンスを発揮することを阻んでいるのか？あるいは社会的な良い動き・成果は何か？	教育格差、子どもの貧困、食品ロス、マイクロプラスチック、LGBTQの存在の理解、ジェンダー問題と政治など

# 4年生のSAから見た スタートアップセミナー 自主自律

「ご協力いただいたSA」

造形表現学科4年  
H・Fさん  
教育福祉学科4年  
Y・Mさん

スタートアップセミナー 自主自律を受講した学生たちは、その後どんな4年間を過ごしたのだろうか。今年度、SA（スチューデントアシスタント）として授業をサポートしてくれた2人の4年生に、スタートアップセミナー 自主自律と自身の学生生活について振り返ってもらった。

## Q.1年生で受けたスタートアップセミナー 自主自律で印象に残っていることは何ですか？

**Fさん** オンラインでのグループワークです。私が受講した令和2年度は、新型コロナウイルスによる影響で全ての授業がオンラインでした。初回授業のグループワークでは、お互いの顔が見えない中、どのようにコミュニケーションを取るべきかが分からず、沈黙が生まれてしまうこともありました。この経験から、グループワークをオンラインで円滑に進めるためには、相手が見えないため、あいづちや復唱（ミラーリング）といった声による傾聴の姿勢や対面時以上に伝わりやすい話し方を意識することが大切だと感じました。

**Mさん** 他学科の同級生と仲良くなれたのが嬉しかったです。この授業が無ければ、絶対に交わることの無かった人たちに会えました。一番印象に残っているのは、課題の多さでしょうか（笑）私が受講したときは、事前学習で読む資料が今より膨大で、かつ原本のままだったので、読み進めるのに苦労した覚えがあります。どの講義よりも課題に時間がかかりました。

## Q.この授業がその後の学生生活に与えた影響はどんなことですか？

**Fさん** グループワークの取り組み方を実践的に学べたことで、苦手意識がなくなったことです。受講前は、自分の意見を積極的に話すのが苦手なことから難しさを感じていましたが、授業で学んだアサーションや傾聴の姿勢を意識することで取り組みやすくなりました。

**Mさん** 東京家政大学が開学された当時の女性にとって、勉強ができることは当たり前ではなかったことを学び、今大学に通ってやりたいことが出来ているのはとても恵まれていて改めて感じました。だからこそ、自分の興味のあること・やりたいことをやらないのはもったいないし、自分の人生を豊かにするために、何でもチャレンジしようと思うようになりました。秘書検定・FP・食生活アドバイザーの資格を取得したり、博物館や美術館に定期的に足を運んだり、自分の「やりたい！」という気持ちに正直になれた気がします。

## Q.SAをやってみようと思った理由を教えてください。

**Fさん** 1つ目は、人と関わる活動を通して自分を成長させたいと思ったからです。昨年度グローバル教育センターでイベントの企画や運営に携わるボランティアをした際に、自分の意見を持ち、自発的に考え行動する力など多くの力が身につく、自分自身の成長に繋がったと感じました。この経験を活かし、SAの活動を通してさらに自分を成長させたいと思いました。

2つ目は、1年生が学生生活を楽しく、安心して過ごせるよう手助けをしたいと思ったからです。大学では、授業の履修登録をはじめ、高校までよりも自分自身で選択し物事に取り組むことが多くなり、その難しさを実感して深く悩んだことがあります。授業やボランティア活動などの経験を伝えることで、1年生が今後、自分で選択する際の判断材料になったら良いなと思いました。また、学生生活の中で困難を乗り越えた方法や大切にしていることも話すことで、1年生が私のような悩みを抱えず、前向きに学生生活を送ってほしいと思いました。

**Mさん** まず、自分自身の成長を感じたいと思ったからです。入学当初に受けていた講義に、学びを重ねた今の私が再び関わった時に、何を感じどう考えるのかを知りたいと思いました。また、自分より若い方の考えにも触れたいと思いました。コロナ禍を経験し、色々なものが制約された中で学生生活を送ってきたことによる、私との価値観の違いや大学への想いを感じたいと考えました。そして何より、他大学にはあまり無い制度で、人と違う経験ができると思い志望しました。講義を運営する経験は教師にならない限りないですし、大勢の人の前で話したり、指示を出したりする経験は、社会に出た時にどんな形であれ活かせると思います。

## Q.SAとして活動する中で、心がけていることや印象に残っていることはありますか？

**Fさん** 学生全体の様子をよく見ることを心がけています。例えば、巡回中は話している言葉に耳を傾けて、同じ部分で困っているグループが多いなど感じたら先生に伝えて全体にアドバイスをさせていただいています。学生同士の話し合いが充実している時や集中している時は、話しかけないようにしています。

印象に残っているのは、第5回の授業で自分の学生生活について発表した際に受講生全員から感想文をいただいたことです。1年生にとって良い発表になっていたか不安でしたが、これからの学生生活を送る上での安心材料や希望になったという感想がたくさんあり、微力ながらも役に立てたことが嬉しかったです。また前向きに今後の学生生活を送ろうとしていることが伝わる文章ばかりで、胸が熱くなりました。

**Mさん** 全グループに必ず声を掛けることを心がけています。話し合いが難航しているようなチームにはもちろん、活発に話し合っているチームにも、「良いですね」と伝えるようにしています。先生の説明で1年生が理解しきれていないと感じた時には、補足をしたり、チームを回っている時に伝えたりしています。授業では、回を重ねるごとに

話し合いが活発になっていることを肌で感じています。話し始めるのが早くなり、声も大きくなって、チーム全員が机の中心を向いて体を寄せ合っている姿に親心と言いますか、「いいな」と感じます（笑）

また、チームの発表に対して、SAからではなく学生同士で質問をし合うようになった時に、考えが深まるような鋭い質問をしていて、私のもっとしっかりしないといけないなと思います。

## Q.この授業には3つの特徴がありますが、それぞれについてどのように感じますか？

### ①自校教育（本学の歴史や変遷を学ぶ）

**Fさん** 博物館を見学する課題は、私が受講した際にはなかったため、印象的でした。見学後の感想文を読むと、展示物を通して本学の歴史を学び、楽しみながら理解を深められたことが伝わってきました。

**Mさん** 私はあまり自分が進学する大学の歴史について興味がある学生ではなく、自ら調べることは無かったと思うので、この講義を通して、開学当時の女性の学びや自立への意識を知ることが出来て良かったと思います。大学で学べる有難さをより感じました。

### ②学部・学科横断の混在クラス

**Mさん** 自分の所属学科以外の方と交流出来て面白いと思います。同じ学びに興味のある仲間とは違う考えや価値観を持つ学生に出会えて楽しかったです。最初は緊張しますが、社会に出る準備としてとても有用だと思います。

### ③協同学習（グループワーク）

**Fさん** 同じ課題に取り組んでもグループで共有するとそれぞれ違う考えを持っており、自分にはなかった考え方を知ることによって、自分自身の価値観を広げられたと感じました。

**Mさん** 学習を進めてこないのでチームに迷惑がかかるので、自分の役割を責任持って行う自覚が育つと思いますし、自分には無い意見を持つ人が大勢いることを知ったり、時には自分の意見を折って結論を出さなければいけなかったりと、自分の世界を広げ、とても成長できる場だと思えます。

## Q.今後、授業内でこんな取り組みがあったらいいなと思うことはありますか？

**Fさん** 入学したばかりの1年生が今後の学びを具体的に想像できるような取り組みがあったら良いなと思います。たとえば授業の中で自分の所属学科について調べる課題がありますが、学科の上級生から所属学科について詳しい話を聞く機会があれば、HP上では分からないような学科の特徴や学びについて理解でき、今後の学生生活に活かせるのではと思います。

スタートアップセミナー 自主自律での経験がその後の充実した学生生活に繋がりを、SAの活動によって後輩たちに還元される。そしてその活動からまた、先輩であるSAも何かを得て成長するといったサイクルができていようだ。彼女たちの今後の活躍にも期待したい。

## 新入生ウェルカムパーティー in板橋キャンパス

PROGRAM 17:20～ 開会・レクリエーションゲーム  
17:40～ 学科や大学生活について上級生スタッフから説明&交流  
18:40～ 閉会(※以後、個別相談)

4/13  
THU

・児童学科 ・初等教育学科 ・服飾美術学科 ・環境教育学科  
・造形表現学科 ・英語コミュニケーション学科

4/20  
THU

・栄養学科 ・管理栄養学科 ・心理カウンセリング学科  
・教育福祉学科 ・保育科 ・栄養科

CRED  
REPORT



学生CRED

令和5年春

# 新入生ウェルカムパーティー

DATA

場所：16号館の各教室

参加人数：262名（上級生40名、新入生222名）

相田 澄怜

人文学部教育福祉学科2年

毎年恒例の新入生と上級生の交流会である『新入生ウェルカムパーティー』（以下「交流会」と称する）を今年も開催しました。今年はCovid-19の流行も落ち着いてきていることから、昨年に引き続き対面で行うことが出来ました。

交流会は2月頃に企画運営を開始しました。交流会の各学科の上級生スタッフの募集をかけました。上級生スタッフには事前に資料作成をお願いしました。学科の個性が出た、分かりやすい資料を作成していただきました。

対面で行うにあたって意識したことは教室選びです。新入生が分かりやすい校舎や教室を選ぶことを意識しました。また、今年は1つの教室で行うのではなく学科ごとに教室を分けて行いました。学科ごとに教室を分けることによって感じたメリットは上級生スタッフと新入生が密に交流出来たということです。1つの教室のなかに同じ学科の学生しかいないので比較的、新入生



が上級生に質問しやすかったのではないかと思います。また、上級生同士の交流も生まれました。準備段階で各学科の上級生スタッフが連絡を取り合えるようにグループチャットを作成しました。グループチャットを作成したことによって開催当日前から交流が生まれ、開催当日には上級生スタッフ同士がとても良い雰囲気になることが出来ました。今回の交流会では履修登録や単位のことだけでなく実習や就職活動に触れている学科もあり、新入生だけでなく上級生スタッフも今後の大学生活において重要なことを学ぶことが出来ました。

当日の流れとしては、最初にレクリエーションとして新入生同士でコミュニケーションをとってもらいました。次に上級生スタッフとの交流として上級生スタッフと新入生で4～5人のグループになり、ミニゲームを行いました。ミニゲーム終了後は作成してもらったスライドを使って発表を行いました。学科ごとに教室を分けたこと

によって各教室でスクリーンを使うことが出来、より見やすく、時間をかけて発表することが出来ました。交流会の最後には質問タイムを設けました。アルバイトや学生生活、短期大学では編入についての質問が多く見られました。また授業用のノートを持参した学科もあり新入生が手に取って見ている姿が見られました。

交流会では、上級生、教職員の方々には大変お世話になりました。学生CRED一同、心より感謝申し上げます。



### 新入生から多かった質問

- 履修の決め方、時間割の組み方
- 授業内容や担当教員について（難易度、課題、授業中の雰囲気）
- テスト形式、勉強方法、レポートの書き方
- 資格取得について
- 就活、インターンシップ（時期や種類、準備の仕方）
- サークル、ボランティア（多くて選べない、決め方）
- アルバイトについて（勉強や他活動との両立）

学生CREDが緑苑祭に出店します！

今秋10月21日（土）22日（日）の緑苑祭にてポップコーンを販売予定です。ご来店お待ちしております！



教職員研究会第1部

# 「どうなる女子大?どうする家政大?」

令和5年度の教職員研究会は大河ドラマをもじって、重要かつキャッチーなテーマ設定となりました。歴史ある女子大学の統合・募集停止・共学化等、大きな転換を図った法人のニュースが報じられるなか、「社会や受験生が女子大学、高等教育に求めていることはどう変わっているのか」、「そのような環境において、女子総合大学である東京家政大学はどのような展望があるのか」をテーマに研修を実施しました。

まず、徳永理事が基調講演「雇用就業に関連する社会の変化を踏まえた大学教育の提供」として、特に大学の出口部分「就職」を切り口に高等教育政策及び市場動向について解説をしました。企業採用要件のスキルベースへの移行、国際的通用性の高いスキル証明としてOpen Budge形式等のMicro-Credentialsの重要性が高まっていること、ChatGPT等の新技術を活

用できる人材育成を高等教育に含めていくこと等、社会要請対応としての高スキル人材養成及びリスキリングへの実装が示唆されました。

続いて「副学長シンポジウム」として、学長と共に本学の改革を推進する「副学長」にスポットを当て、4名の副学長ディスカッションを通じて、全教職員に本学の改革の方向性を共有しました。シンポジウムでは常時コメント受付のほか、「あなたが副学長なら本学で何をしますか?」といった問いかけを通じて教職員からもリアルタイムで討論テーマを集めることで、教育・経営・施設等の幅広い話題が展開されました。出てきた内容の中には

- 「引く張る」ではなく、「後ろから全体を支える」新しいリーダーシップ像の確立
- 総合大学のリソースを活かした分野横断的な教育課程展開の充実

- 大学の所在地域と連動した都市計画や地域連携への展開

- LGBTQや共学化への東京家政大学としての向き合い方

といった今後の改革のコアとなりうるキーワードが多くなり始められ、東京家政大学の今後について参加者は多くの展望が得られました。

当シンポジウムを受け、後期には教育・経営実務にどのように落とし込んでいくのかを「教職員研究会第2部-事務部門トップによるシンポジウム-」により具体化を進めるとともに、各教職員の担当業務が全体政策からどのようにつながっているのか、メタ視点での業務理解をはかります。

Writer 神保 正典  
Masanori Jimbo  
学修・教育開発センター

## コロナ禍前後の学習時間の変化

毎年11月に実施している学生調査（対象：大学1,3年生、短大1年生）から、週当たり「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」時間について、2019（令和元）年度から2022（同4）年度までの推移をグラフに示しました。

コロナ禍により2020年度の授業は全面的にオンラインで行われ、2021年度も引き続き多くの授業がオンラインで行われました。2022年度はほとんどの授業が対面式の実施に戻りました。グラフの回答分布からは、2019年度から2020年度にかけ

て学習時間の増加傾向がうかがえます。2020年度以降は学習時間がどの学年も徐々に減少しています。2022年度、大学1年生と短大1年生については2019年度の回答分布とほぼ同様、大学3年生については減少傾向にあるものの2019年度とくらべ学習時間は増加したようです。

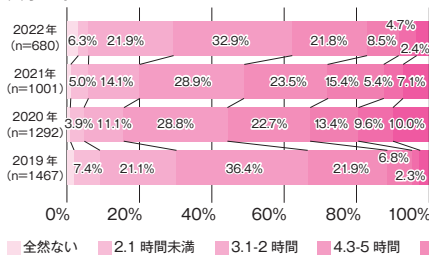
授業外学習時間の確保はコロナ禍以前より課題であり、授業が対面式中心に戻っても学習時間まで元に戻ることは避けたいものです。キャンパス内では、これまでも学生が紙の教科書とノートを開き勉強する姿

はよくみられました。ノートパソコンが必須となった今、その風景は変わりつつあります。学生にとって学習しやすい媒体を選び学習に励めることが大切なことです。

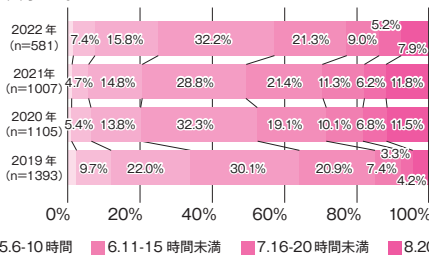
対面式の授業に戻り2年目となる今年度は、どんな結果になるでしょうか。引き続き調査を実施し報告してまいります。

Writer 宮 東城  
Haruki Miya  
学修・教育開発センター

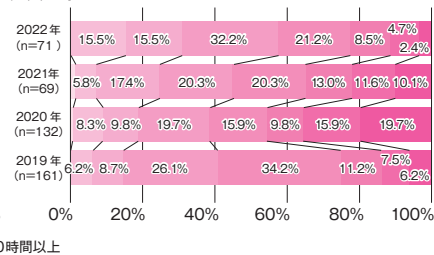
大学1年生



大学3年生



短大1年生



■全然ない ■2.1時間未満 ■3.1-2時間 ■4.3-5時間 ■5.6-10時間 ■6.11-15時間未満 ■7.16-20時間未満 ■8.20時間以上

GPS-Academic 実施報告

# GPS-Academic フォローガイダンス

平成31（2019）年4月より、本学では（株）ベネッセi-キャリアのGPS-Academicを導入し、学生の思考力や学修成果の把握に活用しています。当テストは、大学1,3年生と短大1年生が受検対象で、学生はオンラインで受検後すぐに結果を確認することができます。

受検後には、結果の見方や、今後の学生生活や就職活動への活かし方を学生自身に理解してもらうことを目的とし、フォローガイダンスを実施しています（1年生向けはCREDが主催、3年生向けはキャリア支援課・学務課が主催）。今年度は、板橋キャンパスでは全学科合同でオンライン開催、狭山キャンパスでは学科別に対面で開催しました。

特に、1年生向けのフォローガイダンス

では、今年度から導入が始まった学修ポートフォリオシステム「K-PORT」と関連させ、GPS-Academicの受検結果を踏まえて「K-PORT」へ自身の目標を入力してもらいました。参加学生は講師の話を熱心に聞きながら、ワークシートにメモをとったり自分の立てた目標をK-PORTに入力したりしていました。まだ入学して間もない1年生にとって、大学での目標を言語化することは難しく感じられたかもしれませんが、現在の自分の能力や経験をGPS-Academicを通して確認することで、より具体的な目標を立てやすくなったのではないのでしょうか。

今後も、テストを受検することにとどまらず、その後学生自身がテスト結果をしっかり活用し、思考力や姿勢、経験の向上



を目指せるように支援してまいりたいと思います。

**Writer** 播磨 椎菜  
Shiina Harima  
学修・教育開発センター

GPS-Academic 実施報告

# 教員向け結果報告会

6月～7月にかけてGPS-Academicの教員向け結果報告会が学科別に開催されました。

例年、学部ごとに報告会を実施していましたが、自己点検評価やアセスメントの検討時にGPS-Academicを有効活用することを目的とし、今年度は初めて学科単位で報告会を実施しました。Webexを使用したLIVE配信で、参加できなかった先生方へは後日録画を共有し、視聴できるようにしました。実施日程は以下の通りです。

- ・6月1日（木）：子ども支援学科
- ・6月6日（火）：教育福祉学科
- ・6月7日（水）：造形表現学科、栄養学科／管理栄養学科／栄養科（合同開催）、英語コミュニケーション学科、リハビリテーション学科
- ・6月20日（火）：初等教育（児童教育）学科
- ・6月21日（水）：服飾美術学科

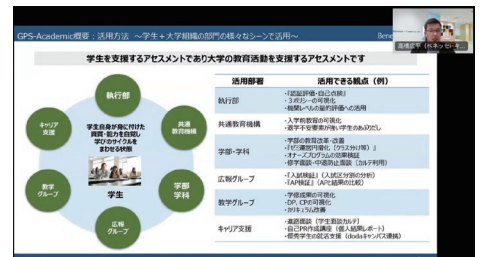
・6月28日（水）：児童学科／保育科（合同開催）

- ・7月20日（木）：看護学科
- ・7月25日（火）：環境教育学科
- ・7月26日（水）：心理カウンセリング学科

報告会の中では、GPS-Academicの概要、学科の所属学生のスコア傾向（経年変化や入試形態ごとの特徴、同学問系統の他大学学生との比較等）、DP検証への活用方法など、様々な観点から学科ごとに個別化した内容でご報告いただきました。また各学科で策定したアセスメントプランやアクションプランの内容を踏まえ、参考となりそうな他大学の事例等もご紹介いただきました。

参加者からは以下のような感想が寄せられました。

・データをもとに、本学科の学生の状況を知ることができました。肌で感じていること以外の学生の側面を知ることができ



たことは貴重な情報と思えました。今後の教育にどうかしていくかが課題ですが、学科教員同士の議論の場も必要と感じています。

- ・レジリエンスや経験のことなど参考になりました。コロナの中で経験できなかったことも多かったのだらうと思っております。これからいろいろな経験をさせて、柔軟で力強く育てていきたいと思えます。
- ・同学年のスコア変化と意識調査の特定の項目によるバブル図は参考になりました。このようなもう少し具体的な分析から、課題解決の方法を考える必要があると感じました。

**Writer** 播磨 椎菜  
Shiina Harima  
学修・教育開発センター

# 2022年度授業アンケート結果を振り返る

本学では毎年、履修授業ごとにアンケートを実施しており、学生自身が授業への取り組みや到達目標の達成度を振り返るとともに、結果を大学が授業改善やカリキュラム編成等を行うための参考資料としています。集計結果および教員のコメントは大学HPにも掲載していますが、今回改めて昨年度の授業アンケート(\*1)の結果を振り返りました。特に、学生の授業および関連学修の取り組み方に影響すると考えられる一部の設問について、一昨年度との比較も交え分析・考察を行いました。

また、分析には昨年度から導入しているIRシステム「QlikSense」を使用しました。

## すべて対面実施は8割弱、対面とメディアの組み合わせも

各項目をみる前に、2021年度と2022年度の授業の実施方式を比較します(図1)。2021年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響ですべて対面での授業は全体の1割以下だったのに対し、2022年度は感染対策をとった上でほとんどの授業を対面で実施しました。しかし、対面とメディアを組み合わせた授業も2割ほど残りました。

## 予習・復習時間は減少したが、満足度・達成度は維持

続いて、2年間で回答に変化があった

設問の1つ、予習・復習についてみていきます。「ほとんどしなかった」学生の割合は、予習は約7%、復習は約9%増加し、逆に「1～2時間」「2時間以上」した学生の割合は、予習は約6%、復習は約10%減少しました(図2・3)。一方で、満足度・達成度は回答の分布は大きく変わらず、共に9割以上の学生が「満足／達成できた」「ほぼ満足／ほぼ達成できた」と回答しています(図4・5)。

予習・復習時間の減少は、冒頭でみた授業の実施方式が影響していると思われます。メディア授業では事前学修が課された分予習が増えたり、授業動画を見るだけでは理解が不十分で復習に時間を割いた学生が多かったが、対面授業においてはメディア授業で伝わりにくかった部分が解消されたことにより授業外での自習時間が減少したと考えられます。

このように、コロナ禍における授業の実施形式の変化の中で学生の授業外での取り組み方も大きく変化しました。一方で、満足度・達成度の回答分布にあまり変化がなかったのは、メディア授業で様々な障壁や制限がある中でも、先生方の授業の質を落とさないための努力や工夫があったからではないでしょうか。

## 講義では予習・復習の有無に達成度の差あり

予習・復習時間が減少した一方で満足度や達成度の分布には変化がみられません。ここで、予習・復習をほとんどしない学生と、時間をかけて取り組んでいる学生の達成度を比較してみます。

図6・7では予習／復習時間別達成度の平均値(\*2)を授業形態別に示しました。

講義形式の授業では、他形態の授業よりも予習・復習を「ほとんどしなかった」場合と「2時間以上」した場合で達成度の差が大きく出ています。特に予習においては、学科によっては0.5近く達成度に差がありました。講義では、授業外学修、特に予習や事前課題に時間をかけることで、授業内での理解も深まり、到達目標に近づきやすくなると考えられます。

CREDでは引き続きデータを収集し、授業やカリキュラムの改善に活かせるような支援ができればと思いますので、学生の皆様、先生方においてはアンケート実施のご協力をお願いいたします。今回は授業アンケートの結果のみに焦点を当てましたが、他の調査結果等のデータとも組み合わせながら、今後も学修成果の可視化を進めてまいります。

図1 授業の実施方式の変化

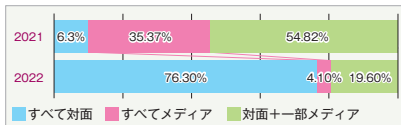


図4 満足度の変化

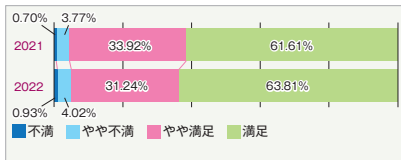


図6 予習時間別の達成度

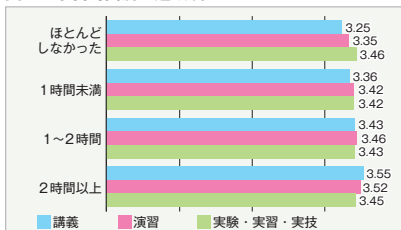


図2 予習時間の変化

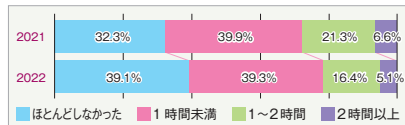


図5 達成度の変化

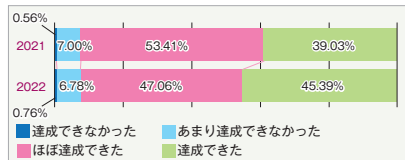


図7 復習時間別の達成度

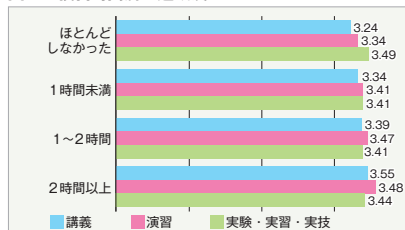
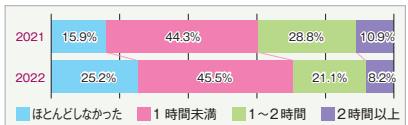


図3 復習時間の変化



### 学内の専任教員の方々は、QlikSenseで今回の結果を見ることができます

本稿で取り上げた以外の項目も学科レベルで確認することができますので、学科別に発行している共有アカウントをご確認の上、ぜひQlik Senseをご利用ください。

(\*1) グラフを含む集計結果は、全回答数を基に算出。回答数は、2021年度60,961件、2022年度75,492件。

(\*2) 4件法により各項目の平均点を比較。最上位の評価(「A:満足」「A:達成できた」)から順に4点～1点の点数を付け、その平均を算出した。



看護学科FD

# 看護学科研究支援プロジェクト 教員向け講演会実施報告

健康科学部 看護学科 太田美帆

看護学科教育支援プロジェクトとして、教員の研究活動の活性化をねらい、多くの教員にとって関心のある教育実践研究をテーマに、講演会を開催しました。

講演テーマは「教育実践を研究につなげ、研究成果を教育実践に還元する」です。順天堂大学保健看護学部教授の北川明先生を講師として招聘し、2023年3月13日（月）13:30～15:10、狭山キャンパスの第1講義室で行いました。看護学科教員34名のうち年度末退職者を除く28名が参加しました。

北川先生には、ルーブリックの信頼性・妥当性の検討について、科研費申請が採択された研究計画書、精神看護学実習で作成したルーブリック、学生へのアンケート結果等を紹介しながら、楽しくわかりやすい講演をしていただきました。例えば、評価は教師自身の価値と信念に影響を受け、実習目標は抽象的に設定されがちである現状において、どのようなルーブリックが良いルーブリックなのか？どのようなことを学ばせ評価しようとしているのか？という研究疑問から出発し、「主体的な決定を支援する」等の実習目標の抽象的な表現を定義から検討し、具体化したルーブリックをお示しいただきました。さらに研究的取り組みとして、学生がルーブリックをどのように思っているのか、無記名自記式アンケート調査を行った結果について、「何を実施すればよいのかわかりやすかった」「自らの看護実践能力の不足をより感じ取った」「正解へのガイドとして考えるならば分量が多すぎてデメリットと考えない」等の学生の反応を紹介してくださいました。

質疑応答の時間も、積極的に質問が挙がり、活発な討議がされました。北川先生に明快にお答えいただくことにより、

学んでほしいことの本質は何かを言語化していくことの重要性が共有され、参加者のルーブリックへの理解が深められた様子でした。

実施後のアンケートには22名が回答し、講演内容は「理解できた」21名、今後の研究活動・教育活動に「役に立つと思う」22名と好評でした。自由記述では、「現在使っている評価表を教員間で見直していく際に役立つ」「抽象的な目標を具体化することで学生の目標が明確になる」「教員が学生に何を学んでほしいかも明確になる」「印象的だったのは、評価をしていて、なぜ？と思った事象からすでに研究は始まるという言葉でした」「科研申請書の計画が、日頃の研究活動をどのように研究に昇華するのか、如実に語っていた」等、実習評価、研究活動の進め方が参考になるという回答がありました。

今回の北川先生のご講演は、看護学科教員のルーブリックへの理解を深め、研究活動への意欲を刺激する機会になったと考えます。

太田 美帆

Miho Ota

健康科学部看護学科准教授  
担当科目：「成人看護学概論」  
「成人看護方法論I」「成人看護の  
実践II」他、主な著書：  
「熟練看護師のプロの技見せ  
ます！慢性看護の患者教育」  
河口てる子編／メディカ出版、  
専門分野：臨床看護学



## 令和5年度 学科主体FD費用申請を受け付けています

CREDでは全学の教職員を対象にしたFDとは別に、各学科・科それぞれの実情に応じて、学科・科単位でのFD活動を推進していくことを支援する目的で予算を設けています。この予算を活用し各学科・科のFDを推進していただきますよう、よろしくお願いたします（申請書の提出が必要です）。なお、金額の上限等ありますが、これを超える可能性がある場合などは必ず事前にCREDまでご相談ください。